自閉症スペクトラムの子どもの力動出来事語と 2 語・多語発話の発達

人間文化学研究科　人間行動論専攻
博士後期課程　行動発達論講座
9513103　坪倉　美佳

本研究では，自閉症スペクトラムの子どもの 2 語・多語発話期の発達について，力動出来事語の発達，そして動詞への移行といった観点から検討を行うことを目的とした。しかしながら，日本語における力動出来事語の発達に関する資料は少ない。そのために，日本語を学習している子どもではどのような力動出来事語がみられるのかについて，本研究において明らかにした。そして，それをもとに，自閉症スペクトラムの子どもの力動出来事語の発達について検討を行った。

第 1 章では，自閉症スペクトラムの子どもの 2 語・多語発話の発達について展望した。定型発達の子どもでは，2 語・多語発話の発達における初期の統語の発達において，近年，動詞が注目されており，自閉症スペクトラムの子どもの 2 語・多語発話の発達を考えるうえでも重要であると考えられた。しかしながら，自閉症スペクトラムの子どもでは，動詞の発達に困難さがみられることが明らかとなった。このような動詞の発達と関連して，動詞の基礎となる語として力動出来事語（McCune,2008）が注目される。力動出来事語は，空間における可逆的な移動について示す語（McCune，2008）であり，自閉症スペクトラムの子どもでは力動出来事語の獲得に困難さを示すことが考えられた。そして，このことが動詞の発達，さらには，2 語・多語発話の発達に関連していることが示唆された。

そこで，第 1 章では，自閉症スペクトラムの子どもの 2 語・多語発話の発達において，力動出来事語という観点から自閉症スペクトラムの子どもにおいて困難さが指摘されている空間的な語や可逆的な出来事に関する語の発達，さらに動詞の発達について検討していく必要があることが明らかとなった。

第 2 章では，自閉症スペクトラムの子どもの 1 語発話期から 2 語発話期にある自閉症スペクトラムの事例 A 児の協力のもと，自閉症スペクトラムの子どもの 2 語・多語発話の発達について検討を行った。その結果，これまで指摘されていたように，A 児にも動詞の発達に困難さが示された。それには，パターン化された発話による語彙の広がりにくさが関連している可能性が示唆された。また，軸語を中心としたパターン化された発話に変化がみ

られたとき，動詞を伴う 2 語発話がみられたことから，自閉症スペクトラムの子どもの 2 語・多語発話の発達における動詞の重要性が示された。これらのことから，自閉症スペクトラムの子どもの 2 語・多語発話の発達について明らかにするにあたって，動詞の発達の基盤について検討していく必要性が示された。

第 3 章では，自閉症スペクトラムの子どもでは，獲得に困難さがあると考えられる力動出来事語の発達について，1 語発話期から 2 語・多語発話期への移行期にある自閉症スペクトラムの事例，B 児と C 児を対象に McCune（2008）によって提示されている英語における力動出来事語から，その出現について検討した。その結果，McCune（2008）の力動出来事語をそのまま日本語に訳し，検討した場合，＜経路・直示的経路＞，＜移動出来事・否定（反転）＞の語は早期から出現し，＜図と地・包含＞，＜経路・垂直的経路＞の語は獲得に時間がかかることが示唆された。また，力動出来事語を含む語結合についても，定型発達の子ども（McCune（2008）の事例）と比較して少ない傾向が示され，自閉症スペクトラムの子どもでは，力動出来事語の出現に偏りがあることが示唆された。このことは，力動出来事語が他の語で表されている可能性や，発話された語のフレーズ化，パターン化によって他の語へ広がりにくいことが考えられ，より豊かな発話には力動出来事語のカテゴリといった語やその使用の広がりが関わると考えられた。また，他の語で表されている可能性があることからも，新たに，日本語での力動出来事語の発達について検討する必要性が示された。

日本語においては，力動出来事語の発達に関する資料がまだ十分でない。そのため，第 4 章では，定型発達の子どもを対象に，力動出来事的な状況における音声の発達について検討した。また，力動出来事的な状況における音声の出現順序にも着目した。その結果，＜経路・直示的経路＞の「どうぞ」や＜図と地・包含＞の「開けて」など英語での分類と共通した表現がみられた。また，日本語の特徴として，擬音語や幼児語によって力動出来事を示すことがみられた。物の名称による力動出来事語もみられ，そのなかには，力動出来事的な意味が含まれていることが考えられた。

力動出来事語の出現順序に関しては，＜経路・直示的経路＞と＜移動出来事・反復＞が他のカテゴリに比べ早く出現し，＜移動出来事・閉塞＞と＜経路・目的終了＞は出現が遅い傾向が示された。このことから，事例自身の目の前で移動が生じること，事例の要求に関する語は比較的早期から出現し，反対に移動した状態について言及する物は出現に時間がかかると考えられた。

第 5 章では, 2 語発話がみられ始める時期における日本語の力動出来事語の発達について定型発達の子どもを対象に引き続き，検討を行い，日本語における力動出来事語について明らかにした。この時期には，McCune（2008）の指摘する力動的な意味と事物の意味をそれぞれ別々に示す語結合がみられた。また，名称同士による語結合も出現し，語結合がみられても，力動出来事と事物の意味が別々の意味で示されるとは限らなかった。

第 4 章，第 5 章の結果から，日本語における力動出来事語では，擬音語や幼児語に加え，名称によるものが含まれるという特徴が明らかとなった。そのため，日本語において力動出来事語を分類するには，文脈から検討する必要性がある。また，2 語発話出現期では，母親とのやり取りのなかで新たな語の提示や，伝えようとさまざまな語を使用することを通して，場面により適した語が出現することがわかった。しかし，まだこの時期には「開ける」が図と地の関係性全体に適用されるなど，力動出来事語のカテゴリにおいて未分化さを示した。

第 6 章では，第 4 章，第 5 章の結果をふまえたうえで，自閉症スペクトラムの子どもの力動出来事語の発達について検討した。その結果，力動出来事語のすべてのカテゴリで発話が認められた。定型発達の子どもの日本語力動出来事語と共通する語も発話され，それらの語の発話は，少数ながらも他の語と比較して 2 語発話に含まれる傾向が示唆された。また，自閉症スペクトラムの子どもでは，力動出来事に関する発話がみられても，その語の反対を意味する語（例えば，開けるに対する閉めるなど）の出現に困難さが示唆された。そして，それらが，力動出来事語の発達，さらに 2 語・多語発話の発達に影響を与えていることが考えられた。

これらの結果から，自閉症スペクトラムの子どもの力動出来事語，動詞の発達から， 2 語・多語発話の発達について考察した。自閉症スペクトラムの子どもの発話では，パターン化された発話によって，発話される力動出来事が特定の遊びなどに限られることがあり，その場面に依存しているため，時間的空間的関係の理解が十分にされていない可能性が示唆された。さらに，発話される語が限定されることは力動出来事語においてもみられた。それは，力動出来事語において，力動出来事の反対の方向性（例えば，「行く」に対する「来る」など）に言及することの困難さにもつながっていると考えられた。実際に，2 語発話出現段階にあった B 児では，＜経路・直示的経路＞の物の受け渡し場面で，‘渡す’という方向性よりも‘取る’，‘受け取る’といった一方向の行動が主であった。しかしながら，力動出来事語において反対の方向性（つまり両方向）について示す語が出現した事例（C 児）

は，2 語発話移行期にあり，多語発話も増加していた。この事例にもパターン化された発話はみられたが，パターン化した語を軸語にした 2 語発話がみられ，力動出来事語を中心とした 2 語発話が出現していた。そのような事例では，語結合において事物の意味と力動的な意味を別々に示す動詞，真の動詞が出現しており，それは力動出来事語において以前発話されていたものだった。これらのことから，力動出来事語が発話される場面の広がり，そして反対の方向性（つまり両方向，例えば「上」に対する「下」など）について言及できることが 2 語・多語発話の発達において重要となることが示唆された。そして，語の広がりのなかで力動出来事語に含まれる動詞が出現し，それらが語結合によって真の動詞へと移行していくことからも，発話場面の広がり，発話される力動出来事の方向性が広がること，そしてそれらが適切な語へと変化していくことが，動詞の発達，そして 2 語・多語発話の発達へとつながることが明らかとなった。

これらのことから，自閉症スペクトラムの子どもにおいて，力動出来事において両方向の力動出来事語（例えば，「行く」に対する「来る」など）が出現する過程について検討していくことが，自閉症スペクトラムの子どもにおける力動出来事語の発達において必要となることが考えられた。